

ナギサと リクオと 幸せのハコ

葉月 十日

最後の1ページを読む前に、必ずハンカチをご用意ください。

神様。ボクに不具合を起こしてくれてありがとう。
僕にコイをくれてありがとう。
心の中で、彼もまた、祈るように何度も繰り返し呟いた。
——本文より。

これは、少年が少女と出会い、
そして眠りにつくまでの
恋と幸せと1つのハコをめぐるお話。

Part.1

歪んで、千切れて、漂って。

空に浮かぶ雲を見る度、リクオは不思議な心地になった。

あの白い雲は、どうして空に浮いていられるのだろう。

どうして落ちてはこないのだろう。

どこで生まれて、そして一体どこに消えていくんだろう？

リクオは雲に触れてみたかった。しかし、灯台に登っても届かなかつたし、梯子を使ってみても全然、届く気配はなかった。

あれはどんな感触なのだろうか。

白い時は柔らかく見えるけれど、灰色の時は固く見える。

青空に浮かんでいる時はとても温かそうなのに、太陽を覆っている時はひんやりと冷たそうな感じがする――。

そんなことをぼんやり夢想していると、ピリリリ。三十分の経過を報せるベルがなった。

休憩時間が半分終わった。

あと三十分で仕事に戻らなければいけない。

リクオは一度首をグルリと回転させて、また、空を――雲を見上げた。

リクオにとって一時間の休憩時間は、ただ島の西端に座って空を見上げるだけの時間だった。

なぜ自分がひたすらにソレを見ているのか。

リクオはその理由を知らなかったけれど、視界に入る風景は彼の心を温かくしたから、特にその理由を知りたいとは思わなかった。

今日の雲は、柔らかそうだ。

それに、温かそうだ。

リクオは何回目になるだろうかわからない台詞を呟き、それから大きな欠伸をした。

センセイは欠伸をすると気持ちいんだと言うんだけど、何度やってみても、リクオには、それがよくわからない。

それでももう一度と、リクオは欠伸を試みる。関節がギギギと、心地良さそうな音をたてた。

――――。

と。大きく開けた口を、ゆっくり閉じたとき。

灯台の向こうからなにかが聞こえた気がした。

リクオは首を傾げた。

今、確かに何か音が聞こえた。灯台の裏から。コンクリートの軋む音だろうか。

しかし、その割には、とても綺麗な音だった気がする。

彼が頭の中でそんな考えを回していると、もう一度、さっきよりも長い音が聞こえた。

今度ははっきりと知覚できる確かな音だった。

リクオは腕の時計をチラリと見てから、ゆっくりと立ち上がった。

まだ休憩の終わりまで十五分あった。

休憩が終わらないうちにそこを立ち上がるのは、初めてのことだった。

初めて、がrikオは少し怖かった。

それでも気になるので、彼はガクガクと震える膝を厚い手のひらで抑えながら立ち上がる。

そろそろと灯台に近付き、彼は白い、でも少し汚れて茶色い、ギザギザしているコンクリートに耳をつけてみた。

ビュウンビュウンと空っぽの音が彼の頭の中に響く。しかし、それはさっき聞こえた綺麗なものは程遠い、色のない音だった。ベッドに耳を押し付けたときの音に似ていた。

rikオは灯台から耳を離し、薄茶色の壁を五本の指でなぞりながら灯台の裏側、島の本当の西端に向かって歩いた。

足はギシギシと他人のモノのようで、進む速度は遅かった。

彼は初めて以上に未知が怖かったから、まだ見たことのない灯台の裏側に回るのが、怖くて怖くて堪らなかったのだ。

それでも気になる。だからrikオはゆっくりと、でも着実に島の西端に近付いた。

もう少しで灯台の裏側に辿り着くという、その時。またあの綺麗な音色が聞こえ始めた。

今度のそれは、すぐには消えなかった。長く、長く、青くて高い空に昇って行くように響く。

rikオはいつの間にか灯台から手を離していた。

そして一步一步、その音に惹かれるように足を動かしていく。

もう怖くなかった。ただ、綺麗だなと思った。

その音はよく聴くと、声だった。誰かがしゃべっているのだろうかとrikオは思った。

初めてみる島の岬先は尖っていて、その先には空と同じくらい青い海がずっとずっと向こうまで広がっていた。

その青い空と青い海の中心に、音の音源が立っていた。

音はやはり女の子の声だった。女の子は背後に近づくrikオの存在に全く気が付かないまま、空と海の境界で、綺麗な声で、一人で、しゃべっていた。

髪は黒くて、腰のあたりまで伸びていた。服は背後にそびえ立つ灯台よりも、目前に浮遊する雲よりもずっとずっと白くて、太陽の光を浴びて光っていた。

綺麗。rikオは女の子を表すのに適した言葉を、それしかもっていなかった。綺麗。とにかく、綺麗。

rikオの足はガクガクと震えた。もう怖くはないはずだった。それなのに、女の子の黒い髪と、白い服と、それから——声。その三つの要素を認識するたびに、何故だか足がギシギシと軋むのだ。

声をかけることも立ち去ることもできずに、彼はただ灯台と、彼女の間に佇んでいた。

まるで時間が止まってしまったようだな、とrikオは思った。

停止してしまった世界に、声だけが存在している。空気を満たしている。

ピリリリ。

半ば本気でそう思っていたから、rikオは三十分を知らせるその音が響いたとき心底驚いた。慌てて左腕の時計を右手で叩いて止める。音が止んでほっとした時、彼は空気を満たしていた声

まで止んでいる事に気がついた。

島の先端に目をやると、さっきまでずっと雲を見て誰かに話しかけていた少女が、灯台の方を向いていた。もちろん何も語らない灯台を見ていた訳ではない。彼女はリクオを見ていたのだ。

リクオは慌てた。どうしよう、逃げてしまおうか。と考えた。

しかし彼はギリとこぶしを強く握りしめて、言った。

「ねえ。誰としゃべっていたの？」

リクオの質問に、女の子は目を丸くして首をかしげた。

しかしそれはほんの一瞬のことで、次の瞬間女の子は笑いだし、丸くした目を優しくやんわりと細めて、口元をスッと吊り上げた。そして言った。

「テンシだよ」

「テンシ？」

「そう、テンシ」

テンシは神の使いで、雲を伝って地上に降りてくる。センセイがそう言っていたのを思い出しながら、リクオは首をかしげた。

「どこにも、誰もいないよ？」

女の子はリクオの不思議そうな顔を満足そうに眺めて、島の舳先からゆっくりと灯台に近付いてきた。そして彼のすぐ目の前に立ち、くるりとまた空と海の方に向き直った。

「ほら、あそこにいるでしょ？」

女の子の長くて細い指は空を指さしている。でも、リクオには誰かがいるようには見えなかった。そこにはただ雲があるだけだった。

「雲しかないよ？ 雲に話しかけていたの？ 雲がテンシなの？」

「あはは、駄目だよ。質問は一つずつしないと。一番、何が聞きたいの？」

一番、聞きたいこと？ リクオは女の子が放った言葉を心の中で租借した。

彼は今まで自分から何かを知ろうとしたことがなかった。未知は怖いから未知のままにしておくのがリクオの方法だった。それなのに、彼は今、とてもたくさんの事を知りたがっている。

ピリリリ。

リクオが質問に溺れそうになっていたその時、またアラームが鳴った。彼は自分が仕事に戻らなければいけなかった事を思い出した。アラームは休憩終了後から五分ごとに正確に鳴る。十分以上戻るのが遅れてしまうとセンセイに怒られてしまうのだ。

焦り始めたリクオを、女の子は首をかしげて見ていた。長くて黒い髪が白い服に張り付いて、小さな桜色の輪郭を半分以上隠している。片方だけ覗く瞳は丸くて、大きくて、空と同じ色をしていた。綺麗な顔。綺麗な瞳。

リクオは、「テンシというのはこの子本人なんじゃないか」と思った。それを聞いてみようかなとも思った。

しかし焦りながら考えた末、彼の口から出たのは最後の最後に浮かんできた質問だった。

「また、明日もここに来る？」

リクオの質問に女の子は、少しの間大きな目を細めて考えて———そして数秒後、はにかんだ笑顔を見せて、答えた。

「うん、来るよ」

．．．

その言葉を聞いて安心したリクオは、彼なりの笑顔を残して灯台から去った。

仕事場に戻ると、もう休憩時間の終わりから十分以上が過ぎていて、結局センセイに怒られることは決まってしまうていた。

でも普段はとても怖くて嫌なはずのソレが、この日はそこまで辛いと思わなかった。

そんなことより胸を満たすのは島の舳先であった女の子の笑顔と、綺麗な声と、テンシのことだった。

リクオは浮き立つような心地のまま、生まれてからずっと続けている仕事を再開した。彼は今まで仕事を辛いと思ったことがなかったし、そもそも仕事を仕事だと感じたことがなかった。

しかし、この日彼は仕事をしている時間を長いと感じた。早く過ぎて欲しい、と思った。仕事以外のことを考えて何回もミスをした。いずれも初めてのことだった。

定刻が終わるまでその状態は続いて、その日の仕事は生れてから今までで一番出来が悪いものになってしまった。このままじゃ、これは海に沈んでしまうかもしれないな、とリクオは思ったけれど、それ以上の事は考えなかった。仕事の失敗も、センセイに怒られてしまうことも、すぐに頭の中から消え去って、思考を覆うのはテンシの女の子のことだった。

部屋に戻るとリクオは急いで体だけ拭いて、布団の中に潜った。早く寝てしまおうと思った。眠ってしまえば時間は早く過ぎる。彼はとにかく早く、彼女に会いたかった。だからギョツと瞼を下ろして、必死に眠る為の努力をした。

なのに、中々眠りは訪れなかった。

眠りたいはずなのに体のあちこちが火照って、眠くなるどころかどンドン眼が冴えていってしまった。

早く、早く、と思いながら、リクオは女の子の顔を思い出した。

長くて黒い髪を思い出した。

晴れた日の雲よりも白い服を思い出した。

思いだせば思い出すほど眼が冴えていく。

彼はその理由を知らなかったから、ただひたすらに憤った。

結局リクオはその日、眠らないまま朝を迎えた。

．．．

午前の仕事もそぞろに終えて、リクオは灯台までの道を、足をつつかえさせながら走った。

今日は昨日と違って雲が灰色で、風は涼しかった。

その空を見てリクオは少し不安になった。

女の子には晴れが似合ったから、曇りの日は来てくれないんじゃないか、と理由もなく思ったのだ。

灯台の前に着くと今日は迷うことなく裏側に回り、島の舳先に向かった。

少しだけ足を運ぶ速度が遅くなった。いなかったらどうしよう。

足がギシギシと鳴るのを堪えながら、島の先端はもうすぐだった。

「——あ」

思わず声をもらした。-

女の子はきちんといた。

灯台の裏側に腰かけて、今日も小さな声で誰かと喋っていた。服は昨日と同じ真っ白な服で、黒く長い髪が冷たい風に吹かれて、そよそよとなびいていた。

「——あ。こんにちは」

リクオに気づいた女の子は柔らかい微笑みを浮かべて、音もなくスッと立ち上がった。その姿を見てやっぱりこの子はテンシだったんだ、と彼は確信した。

「こんにちは。……やっぱり君が、テンシだったの？」

「テンシ？ 私が？」

「うん。テンシは白くて、そして綺麗なだってセンセイが言った」

首を傾げる女の子にリクオは言った。自信満々に。

テンシと呼ばれた女の子は一瞬肩を震わせて、そして澄んだ可愛らしい声で笑った。

「あははは。君、おもしろいね」

「どうして？」

「うーん、どうしてって言われても困るけど。……だって、私がテンシだなんて」

「テンシじゃないの？」

リクオがそう言うと、女の子は嬉しそうに首を振って「テンシじゃないよ」と答えた。

「がっかりした？」

「ううん。じゃあ、君は誰？ さっきもテンシとしゃべってたの？」

「ほら、駄目だよ。質問は一回に付き、一個。じゃあ、私から質問しちゃうね。君は、誰？」

女の子の長くて細い人差し指がリクオの方へ向いた。彼は、昨日言われた間違いを今日もしてしまったことを反省しながら、彼女の質問に答えた。

「ボクは、リクオ。今、昼休みの最中なんだ。……じゃあ、質問一つ。君は、誰？」

「あははは、良くできました。私はね、ナギサ。テンシじゃなくて、人間だよ。よろしくね、リクオ」

ナギサ。ナギサ。ナギサ。

リクオは心の中でテンシじゃなかった女の子の名前を何回も繰り返した。

ナギサ。ナギサ、ナギサ。

どうしてだろう。彼女の微笑みを見ながら、名前を繰り返すたび、心がフワフワと浮き立ってくる。

「……ナギサ」

「あはは、そう、ナギサ。じゃありクオ、今度は私から質問ね。休憩って言うのはなんの休憩？」

「仕事。仕事は毎日九時に始まって、十二時に休憩になって、一時間休憩して、十三時にまた始まって、二十一時に終わって、ボクは眠るんだ」

リクオは自分の一日を振り返りながら、ナギサの質問に答えた。

最後の言葉だけは嘘だった。昨日リクオは眠れなかったから。

「リクオは働いてるんだ？」

「うん」

「偉いね」

「偉い？ だって、仕事なのに？」

首を傾げるリクオを見て、ナギサはまた楽しそうに笑った。可愛らしい声だった。その笑顔を見ると、リクオはとても安心して、その癖とてもドキドキした。

「あははは。……あれ？ リクオは私に質問があったんじゃないの？」

「あっ、そうだった。ナギサは昨日、あ、今日もだけど、誰と話していたの？ テンシは何処にいるの？」

「もー、質問は一つだって言ってるのにー。……ま、いっか。私はね、誰かとしゃべってたわけじゃないよ」

「えっ？ だって、昨日も、今日も、何かしゃべっていたよ」

リクオは昨日の声とさっき自分が来るまでナギサが口にしていた声を思い出し、また首を傾げた。

ナギサはそんなリクオの頬をそっと撫でて、そしてゆっくりと口を開いた。

————その瞬間、綺麗な音色が彼女の口から奏でられていく。

それはまさしく昨日、灯台の裏からリクオを引き寄せた、あの音だった。

ナギサは自分以外の誰かと話しているんだと、彼は思った。

人間以外の何かと。リクオはぼうっと口を開けたまま、その美しい音を聴いていた。雲になったような気分だった。

ナギサが口を閉じると、その音は消えた。

「————リクオが言っているのは、これのこと？」

「そうだよ。ナギサ、ねえ、それは誰と喋っているの？ ボクには全く見えないよ」

「あははは。あのね、リクオ。だからこれは、喋っているわけじゃないの。……ウタってるんだよ」

ウタッテル？ その言葉もリクオに取っては、初めて、だった。首を傾げる彼の頬をまたナギサが撫でた。そして彼女は短く、ウタった。

「——リクオはウタを、知らないんだね」

「ウタ？ ウタヲ？」

「う、た、だよ。あははは、そんな困った顔しないで。私が一人で話している時、それはウタをウタってる時なの。こうやってしゃべってる時と、さっきのは全然違うでしょ？」

「うん、全然違う。ウタ？」

そう、ウタ。ナギサは微笑みながらそう言って、そしてまた、ウタをウタった。リクオはナギサに促されて彼女の隣に腰かけ、雲になった気分でそのウタを聴いた。心が温かくなるのを彼は感じた。それは空を見ている時の温かさよりも、何十倍も、何百倍も温かくてそしてフワフワとして柔らかかった。永遠にこうしていたい。リクオは心の底からそう思った。

———ふっと、ナギサのウタが消えた。リクオが夢から醒めたような心地でナギサの方を見た。彼女は目を丸くして、彼の右腕を指さしていた。

「ねえ、リクオ。鳴ってるけど、いいの？」

「えっ……」

リクオはその時になってやっと、ピリリリと右手のアラームが鳴っている事に気が付いた。

しかも、時計はいつの間にか一時丁度を表示していた。彼は三十分の時にアラームが鳴ったことさえ気が付かなかったのだ。

「……行かなくちゃ」

「お仕事だもんね。頑張ってるね」

「……うん」

リクオはそろそろと腰を上げて、一步だけ灯台から離れてナギサの事を見た。それ以上は動けなかった。動こうとすると胸がキリキリと痛んで、動けなかった。

「どうしたの？ 行かなくて平気なの？」

「行かないと、センセイに怒られる。でも、行きたくないんだ。ナギサのウタを聴いていたいんだ」

リクオは声を震わせながらそう言った。そんな彼の姿を見てナギサは、ほんの一寸目を丸くしてからコロコロと声を弾ませて笑った。

「あははは、大丈夫だよリクオ。私は明日もここで君を待ってるから。また、昼休みにここでウタをウタってあげるから」

「本当に？」

「うん、もちろん。約束」

ナギサは勢いよく立ちあがって、リクオの目の前に飛んだ。そして彼の頬にそっと触れて、温かで麗かなウタを一フレーズだけ、ウタった。

「……ありがとう、ナギサ。これで今日は安心して仕事ができるよ」

「あら。じゃあ昨日は安心して仕事が出来なかったの？」

「うん。昨日、生まれて初めて納得の出来ない仕事をしてしまったんだ。でも、今日初めからきちんと創りなおす。ナギサ、ありがとう」

リクオはお礼に、自分の手をそっと伸ばしてナギサの頬に触れてみた。彼女の頬は自分のと違ってとても柔らかくて、触れているとほぐれてしまいそうな触感だった。

ナギサは白い頬を赤く染めて「リクオはしちや駄目！」と、くすぐったそうに笑いながら離れた。前髪がパラパラとその表情を隠すように揺れた。

ピリリリ。またベルが鳴った。安心は焦りへと変わった。早く行かなければ、センセイに怒られてしまう。リクオは「じゃあ」と小さく残して、ナギサに背を向けて歩き始めた。

「ねえ、リクオ。最後に一つだけいい？」

「うん、一つなら」

「リクオは何の仕事をしてるの？」

リクオは足を止めて、首だけナギサに振り返った。そして、昨日と同じように背後に空と、海と、灰色の雲を背負っている彼女に向かって答えた。

「ハコを創ってる。絶対海に沈まない、綺麗なハコを創れるのがボクの自慢なんだ」

——Part.2に続く。

Part.2

それから毎日、リクオとナギサは島の舳先の、灯台の裏側で会った。1日にたった1時間の逢瀬の中で、二人は空と海を眺めながら言葉を交わしあい、笑顔を与えあった。

リクオはナギサから、「島の外のこと」を聴くのがとても好きだった。彼女は島で生まれた人間ではなく、島の外から来た人間だったのでリクオの知らないことをたくさん知っていた。いつしか未知は、彼にとって怖いものから、心を緩やかに揺さぶるものに変わっていた。

...

ある日、ナギサはウタの話をした。ウタは彼女の命で、彼女の仕事でもあると説明した。

「ウタで何かを創っているの？」

リクオがそう尋ねると、ナギサは嬉しそうに笑って「ううん、違うよ」と首を振った。

「ウタはね、リクオの創っているハコみたいに形になるものを残す仕事じゃないの。ウタはね…
…祈り、なんだよ」

「祈り？」

「うん、そう。私の仕事は神様に祈りを捧げる仕事なの。ウタはね、神様と会話をするための言葉なんだよ」

ナギサは目を閉じて右手を胸の上に、左手を右手の上に乗せてそう言った。その姿が綺麗で、リクオはドキドキした。視線を空と海と灰色でのっぺりした雲に逸らして、彼は尋ねた。

「神様と、何を話すの？」

「うーん、話すって言うよりも、そうね……お願いするの」

「お願い？」

こくりとナギサは頷いて、手を胸に置いたまま目を細めた。

「そう、お願い。今、自分が欲しくて、でも自分だけの力じゃ手の届かないようなものを『どうか、私にお授けください』って神様に、頼むの。神様はね、気が向いたらそれを本当に授けてくれるんだよ。……本当に、気が向いたらけど」

リクオはそれを聞いて、自分だったら何を祈るかを考えた。でも、思い当たらなかった。彼は今が続けばもうそれで十分だと思った。それを考えるのと同時に、ナギサは何を祈っているかが気になった。

「ナギサは、何を祈っているの？」

「えっ？」

「ナギサはウタう時、何を願っているの？」

リクオの質問にナギサは一瞬、不意を突かれたような表情を浮かべた。それから少しだけ黙って、考えて……そして、寂しそうに笑いながら言った。

「……必要とされること、かな」

どうしてナギサが寂しそうなのか、リクオにはわからなかった。

．．．

ある日、ナギサはトリの話をした。トリは空を飛んで、綺麗な声で鳴くのだと説明した。

「じゃあ、トリは雲みたいなものなの？」

リクオがそう尋ねると、ナギサは困ったように笑って「ううん、違うよ」と首を振った。

「トリはね、もっと自由なの。雲みたいに風に流されたり、ただ生まれて消えるんじゃないで、自分の力で飛んで、自分の力でいきたい場所に行くの」

「トリは、なんなの？ トリは動物なの？」

「うん、そう。トリもね、人間と同じで生きている動物。ただトリには羽があって、それをばたつかせて空を飛ぶのよ」

ナギサは勢いよく立ちあがって、島の舳先をなぞるようにして歩きながら両手をバタバタと上下に忙しく動かした。リクオは落ちてしまったらどうしようと不安になったけれど、彼女はニコニコと楽しそうに笑っていた。

「人間は飛べないのかな？」

リクオも立ち上がり、自分の両手を上下に動かしながら尋ねた。ギシギシと音を立てながら両手は動く。でも、空に浮きそうな感じはこれっぽっちもしなかった。

「うん。だって、人間には羽がないもの。リクオ、羽は知ってるよね？」

「テンシの背中に生えている奴でしょ？ 白くて、フサフサで、雲みたいな奴だ」

「あははは、そうそう。あれはね、元々トリのものなんだよ。テンシは人間の理想なの。空を飛ぶことも人間の理想なの。だから、テンシを描いた人はその背中に羽をつけたんだよ。自分は飛べないから、絵の中のテンシに空を飛ばせたの」

ナギサは島の舳先に立ち止まり、リクオではなく空と海と真っ白でデコボコな雲を見ながらそう言った。いつの間にか手を動かすのをやめていた。黒い髪が緩くて温い風に揺らされて、ゆらゆらと白い服と空の境界を泳いでいた。

リクオはセンセイに見せてもらったテンシの絵を思い出しながら、ナギサのその背中を見ていた。

あの白いフサフサを自分がナギサに付けてあげられたならば、彼女にこんな寂しそうな表情をさせなくても済むのに。でも、リクオはナギサに羽を付けてあげることが出来なかった。彼にはハコを創ることしかできなかった。

リクオが悲しくなって俯いていると、さっきまで寂しそうな表情を浮かべていたはずのナギサが笑顔を浮かべて彼の頭を撫でた。

「リクオは優しいね」

「えっ」

「とっても……優しい」

ナギサはそう言って、普段は大きく開いている目を嬉しそうに細めた。そして「優しい優しい」と言って、彼の頭をなで続けた。

どうして自分が優しいと言われるのか、リクオにはわからなかった。

...

ある日、ナギサは故郷の話をした。ナギサの故郷にはキというものが到る所に生えていて、カワという、水がサラサラと流れているものがある、トリのような動物や、彼女のように柔らかくてウタのウタえる人間が沢山いるらしかった。

リクオはその話を半分も理解できなかったけれど、ナギサが楽しそうに話すから彼もまた楽しくなってウンウンと頷いた。そして、一度でいいからナギサの故郷に行ってみたい、と思った。

ある日、ナギサはリョウシンの話をした。二人ともとても優しく、温かかったのに、まだ小さいナギサを残して行ってしまったと言った。

リクオは二人が何処に行ってしまったのか聴こうとしたけれど、それを話すナギサの横顔がとても悲しそうだったので口を噤んだ。でもそのあとすぐに彼女は顔を上げて、今自分の住んでいる場所は自分と同じような子がいっぱいいるし、お昼はリクオに会えるから寂しくないよと言って微笑んだ。だからリクオも安心して微笑んだ。

ある日、ナギサはサンドイッチの話をした。孤児院の宿舎で一週間に一度だけ出るそのメニューが、彼女はとても楽しみなんだと言った。

リクオは食べ物を食べたことがなかったから、それがとてもうらやましかった。仕事場へ戻る道の途中で、試しに道端に転がっている石を口の中に放ってみたけれど、喉を通らなかったので諦めた。

ある日、ナギサはクスリの話をした。これを飲まない具合が悪くなってしまうんだと、微笑んだ。リクオが故障みたいなものかと聴くと、彼女は困ったように微笑んで、こくりと頷いた。

ある日、ナギサはネコの話をした。

ある日、ナギサはサーカスの話をした。

ある日、ナギサはユメの話をした。

ある日、ナギサは――――――。

毎日、毎日、毎日、リクオはナギサの話を聴いた。

ナギサのウタを聴いた。

ナギサのいろんな表情を見た。

そして、一緒に空を眺めた。

海を眺めた。

雲を眺めた。

いつからか、ナギサはリクオの全てになっていた。

十二時から一時の一時間以外の時間も、リクオはずっとナギサの事を考えていた。

ハコを創っている間も、仕事が終わってから始まるまでの間もずっと、ずっと。リクオはナギサと出会ってから一度も眠ることができないでいた。

...

「リクオ。最近、眠っていないだろう？」

そんな毎日が完全に根付き始めたある日、センセイはリクオにそう言った。センセイは一週間に一回だけリクオの創ったハコを取りに来るのだけれど、その時のことだった。

「リクオ。最近ちゃんと眠っているのかい？」

センセイの声はナギサと違って、リクオと同じく平たかった。昔はそれが普通だったのに、ナギサと知り合ってからなんだか冷たい響きであるように感じられた。

「いいえ。眠っています」

「リクオ。嘘を言っはいけないよ。私はちゃんとリクオが眠っているか眠っていないか分かるんだから」

リクオはそれでも首を振って、センセイの言葉を認めなかった。ナギサに言われていたからだ。二人であっていることは他の人には言っちゃ駄目だよ、と。

センセイはそんなリクオの様子を見て、ふうと小さく溜息をついた。そしてリクオの首筋に触れて、手慣れた動作でネジを回して首筋の蓋を開けた。

「ほらリクオ、眠ってないじゃないか。駄目だよ、リクオ。きちんと寝ないと不具合が起きてしまうといつも言っているじゃないか」

センセイはパタンと首筋の蓋を閉めた。リクオはもう否定することが出来ずに項垂れた。頭上からもう一度溜息がもれるのを、胸をドキドキさせながら聞いていた。

「——リクオ。私は怒っているんじゃないんだ」

「……怒っているんじゃないんですか？」

「ああ、そうさ。ただ、どうして眠らないのかその理由を知りたいだけなんだ。どこか不具合があるのかい？」

センセイの口調は、平坦だけれど優しくかった。リクオは俯いたまま、自分がどうして眠れないのかを考えた。ナギサを考えると、体のあちこちが熱くなる。だから眠れないんだということを彼は再確認した。

「……ナギサの事を考えると、眠れないんです」

「ナギサ？」

「はい。いつも昼休みの時間に会っているんです。それでナギサの話を聞くんです。ナギサのウ

タを聴くんです。その一時間はあっというまなんですけど、その他の23時間がとても長いんです。早く眠ってしまいたいのに、ナギサの事を思い出すと眠れなくなる」

リクオは思いつくままに、自らの不具合を話した。センセイは腕を組みながらその話を聴いて小さく「ウタをウタうってことは孤児院の……」と呟いた。

「でも、またナギサに会えばきちんと元に戻るんです。センセイ、ボクはどこかが壊れているんですか？」

「あ、ああ……」

センセイは腕を組んで押し黙った。リクオは不安になって自分の創ったハコの艶やかな表面を撫でた。もし故障していたらナギサに会えなくなってしまう。話が、ウタが、聴けなくなってしまう。そんな事はきっと耐えられない、と思った。

リクオの手がカタカタと震えるのに気付いて、それまで顎に手を置いて押し黙っていたセンセイが今度は長くて重いため息をついた。そして言った。

「——リクオ。もう、孤児院の子に会うのはやめなさい」

「えっ？」

「孤児院の子は、生身の人間なんだ。だから、リクオがそういう感情を持つてはいけないんだよ」

「えっ？」

リクオはセンセイの言っている事の意味が全くわからなかった。全然理解できなかった。

ただ一つだけ。センセイはもうナギサに会ってはいけないと言っている。それだけは理解できた。

「……ボクが故障しているからですか？ だから、ナギサに会ってはいけないんですか？」

「そうじゃあないよ。ただ、リクオとその孤児院の子とは違うんだ。だから、リクオはその子に対してそういう気持ちを持つてはいけないし、そういう気持ちをもったまま接するのはもっといけないんだ。だから、もう会ってはいけないんだよ」

センセイの言葉はきっぱりしていた。そしてもうそれ以上その事については何も言わずに、リクオの創ったハコを点検し始めた。ナギサと違って、リクオの話聞いてくれる様子では全然なかった。彼はギリと強く自分の手を握りしめて、言った。

「全然センセイが言っている事の意味が分かりません。ボクはナギサに会います。ボクにとって、世界の全てはナギサなんです」

「リクオ？」

「センセイに駄目だと言われても、ボクはナギサに会います。絶対に会います」

リクオの足はギンギンと震えて、いつ崩れ落ちてもおかしくない程に各部のパーツが軋み合っていた。怖かった。ナギサに会えなくなることが、なによりも、とても、怖かった。

センセイはしばらくの間また黙った。リクオの仕事場には彼のパーツが軋む音だけ響いた。

「……どうしたことだ」

センセイは平坦な声で沈黙を破って、そしてそっとリクオの頬に触れた。その瞬間、彼はバツと後ろに飛びのきその手を避けた。茫然とするセンセイの表情を見つめながら、なぜ自分がそんなことをしたのか考える。

答えはやはり、ナギサだった。

そこに触れていいのはナギサだけ。気付けば自分の中にそんな感情が芽生えていた。

「リクオ。私の言うことを聞かないのかい？」

「……はい」

「どうして？」

「……ナギサと会いたいからです」

「その孤児院の子に会うことは、私の言いつけを守ることもより大切なのかい？」

「はい」

「仕事と比べたら、どうだい？」

「ナギサの方が大切です」

「センセイとその子、どっちの方が大切だい？」

「……あ。……ナギサです」

なんてことだろう。センセイはぽそりと小さな声で呟き、そしてまたリクオの首筋に手を伸ばしそこを覆う蓋を開けた。そして、その蓋の中にある何かを確認して、また小さく一言「まったく、わからん」と呟いた。

「お前たちが……お前が人間にコイをするなんて、考えられないんだがな」

「コイ？」

「あありクオ、コイだよ。お前の今の不具合を人はコイと呼ぶんだ」

コイ。コイ。なんとなく間抜けに響くその単語を、リクオは心の中で何回も繰り返した。コイ。コイ。

「リクオ。なんで、お前はその孤児院の女の子を大切だと思うようになったんだい？」

「えっ。……ナギサのウタを、聴いたんです。灯台の裏に、ナギサはいたんです。長くて黒い髪と、白い服がとても綺麗で、たくさん話を聴きました。たくさんウタを聴きました」

「ウタ、か。そうか、ウタか……」

センセイはコクコクと頷きながらそう呟いて、首筋の蓋を閉じた。リクオは何故かとても悲しいような、嬉しいような、判別のできない不透明な感情に襲われて、焦りながらも必死に言葉を紡いだ。

「センセイ、ナギサのウタを聴くととても嬉しいんです。ナギサのウタを聴くととても楽しいんです。ナギサは白い服を着ていて、髪が長くて黒くて、センセイのを見せてくれたテンシのようなんです。だから、だから……」

「リクオ、わかったからそんなに焦って喋らないでおくれ。もう、お前の言いたいことは十分にわかったから」

すがりつくようにそう言ったリクオの頭を、センセイはそっと撫でた。

「お前が私の言いつけより優先すべきものを見つけるなんてなあ」

「ナギサの次に、センセイが大切です」

「ああ、わかったよ。もう私は止めないから、リクオの好きなようにしなさい」

「本当ですか？」

センセイはその言葉にこくりこくりと頷いた。そしてリクオの創ったハコの、滑らかに光るメタリックの表面を指で撫でて、言った。

「ただ、これからはきちんと眠りなさい。でないと、心が疲弊してしまうからね。きちんと、眠らないと」

...

次の日リクオはハコを創る際に出た金属の断片を使って、小さなブローチを創った。昔センセイに見せてもらったテンシの羽を思い出しながら、なんとかそれを形にしたのだ。昼休みになると彼はそのブローチを握りしめて、通り慣れた仕事場から灯台までの道のりを膝の関節を軋ませながら走った。

ナギサはいつも通り、長く鋭い島の切れ端に立って、空と、海と、駒切れになって散らばっている白い雲を見つめながらウタをウタっていた。

リクオは灯台に寄り掛かり、声はかけずにその白い服に包まれた細い背中を、無風で揺れずに太陽の光を反射する黒い髪を見つめた。

コイという言葉を出す。センセイは大切だと思えることがコイだと言っていた。そしてそれを不具合だとも言っていた。

リクオは、ナギサが祈る神様に感謝した。神様。ボクに不具合を起こしてくれてありがとう。僕をコイをくれてありがとう。心の中で、彼もまた祈るように何度も、何度も、繰り返し、繰り返し、呟いた。

「――あれ、リクオ？ 来たならちゃんと来たって言わなきゃダメでしょー？」

しばらくするとナギサはリクオが来ていた事に気がついて、口調は不満げに、そのくせ表情は笑顔で、灯台の方、彼のもとへと歩みよってきた。

「どうしたの、リクオ？ どうしてそんなに震えているの？ 具合が悪いの？」

「質問は、一回につき、一つじゃないといけないんだよ？」

「もう、リクオったら。じゃあ、どこか具合が悪いの？」

ナギサは首を傾げてリクオの灰色の無機質な瞳を見詰めた。

彼はこくりと頷いて、左手に握っていたブローチを彼女に差し出した。

「ナギサ。ボクは具合が悪いらしいんだ。センセイは、ボクはコイをしていると言っていた。それで、生身の人間に……ナギサに対して、そういう感情を持つてはいけないとも言われた。……でも、最後はいいと言ってくれたんだ。ボクは、ナギサのそばにいていいと言ってもらえたんだ」

リクオは必死に考えていたことを口にした。彼の胸はまた、昨日――いや、もっと前から彼の心を覆っていた不透明な感情に襲われて、ギシギシと軋んでいた。

ナギサはリクオの掌に載せられたブローチを、目を丸くして見つめた。そして、そっとそのブローチごと彼の左手を両手で包みこみ、尋ねた。

「リクオ、つまり……どういうこと？」

「つまり、ボクはセンセイにナギサにそのような感情を持ってもいいと言われた。コイは不具合だけど、その不具合は直さなくてもいいと言われた」

「リクオは……私に、コイをしているの？」

リクオは左手を包み込む柔らかさを、温かさを感じながら「きっと」と呟いた。

ナギサは重なり合う掌をじっと見つめながら、また囁いた。

「そのような感情って言うのは、つまりどういう感情なの？」

「……ボクがナギサのことが大切だと言う感情。ナギサのそばにずっといたいという感情」

「リクオは、私のことが大切なの？」

リクオは頷いた。

「リクオは、私のそばにずっといたいなの？」

リクオは頷いた。

「これは……？」

ナギサは僅かに掠れた声でそう言って、リクオの左手を包んでいた両手をそっと開いた。溶接のせいで少しだけくすんでしまったメタリックのブローチが、鈍い光を発していた。

「羽なんだ」とリクオは答えた。

「ナギサに何かをあげたくなつたんだ。本当は本物の羽をあげたかったけど、ボクはハコ以外にはこんなものしか創れないから」

「リクオ……」

小さくかすめるように呟いて、ナギサは彼の固い胸に抱きついた。

きつく閉じた瞼の隙間から、透明な液体がポロポロと零れてリクオの胸を濡らす。

彼女のか細い、真っ白な肩を支えながら、今度はリクオが尋ねる番だった。

「ナギサ、どうしたの？ 具合が悪いの？ クスリは……」

「違うよりクオ、もう……。バカ……。バカっ」

「ごめん、ナギサ」

「……謝らなくていいんだよ。あははは、私もやっぱり、具合が悪いみたい」

ナギサはごしごしと洋服の袖で目元を拭って、顔を上げた。

瞳がキラキラと光っていて、小さな海がそこに広がっているみたいだった。

「でも……治さなくてもいいかな」

「ナギサ？」

「リクオは、ずっと私のそばにいてくれるんだよね？」

リクオは頷いた。ナギサは彼の掌にのせられたブローチをそっとつまみ、白い服の胸元に付け、そして、大きな目を線にしてあはははと笑った。

本当にテンシみたいだ、とリクオは思った。

「約束だよ？ ずっと、そばに居てね？」

リクオは大きく頷いた。

—Part.3に続く。

Part.3

二人の日々はなだらかだった。

島から覗く青い海のように。

島を包み込む青い空のように。

リクオとナギサはただそばにいて、言葉を交わしあって、笑顔を与えあう毎日を過ごしていた

。

リクオは相変わらず眠れなかったけれど、彼はその不具合をきちんと受け入れていた。

ナギサと会って、ハコを創って、そして音のない夜に一人ナギサの事を考える。

日々は満たされていた。リクオはナギサの口にした「ずっと」という言葉を信じてやまなかった。

それでも少しずつ、一日という単位では確認できないくらいの速度で、変化は起きていく。

例えばナギサは故郷の話をしなくなった。島の外の話をするのをやめて、昨日一日、何があったのかをリクオに教えるようになった。

例えばリクオは「どうして?」と言わなくなった。ただ、ナギサの話す穏やかで優しい話に温かな気持ちで相槌を打つようになった。

例えば二人はキスをするようになった。リクオの冷たくてかたい唇に、ナギサの柔らかい唇を重ねるだけのキスを、一日に一度、彼が仕事に戻る時にだけするようになった。

ナギサの白い服を彩るブローチが増えた。

ナギサの飲む薬の量が増えた。

ナギサの黒い髪をまとめる髪飾りが増えた。

ナギサのする咳の回数が増えた。

リクオは、変化に対して疎かったからそれらの事に気が付かなかった。

ただ無邪気にナギサとの「ずっと」を信じて日々を過ごしていたのだった。

...

しかし、日々の終わりは突然きた。

その日は雨だった。

島には長い間降っていなかった、大粒の雨が横殴りに降っていた。

リクオはその日の昼休みも豪雨の中をいつもと変わらず、心を弾ませて灯台の下へ向かっていた。

灯台の裏側島の舳先を覗く。雨がひどくて視界が悪かったから、空も、海も、真っ黒な雲も霞んでしまってよく見えない。

目元をごしごしと拭った。そして、灯台の裏側と島の先端をぐるぐると何回も見まわした。

ナギサがいなかった。

リクオはもう一度灯台の裏側と島の舳先をぐるぐると、今度は歩きながら回って確認してみた。一周した。二周した。三周した。

ナギサはいなかった。

足がギシギシと震えた。雨の中で、リクオは灯台に寄り掛かってはあと一つ息を吐いた。

そして、どうしてナギサがないのかを考えた。

拭わないと視界はすぐに水滴のせいでぼやけてしまう。ごしごしと拭いながら、リクオはふと気が付いた。

そうだ。確かセンセイが昔、人間は雨に濡れると風邪をひいてしまうんだと言っていた。自分達が出会ってから、雨が降ったのは今日が初めてだ。雨が降ると、ナギサは来ないんだ。

そうかそうかとリクオは頷いた。そして、震えていた足をクシャリと折って灯台にもたれかかるようにして座った。

忌々しい雨だなとリクオは思った。こんな雨にナギサの白い服は似合わない、ナギサの黒い髪は似合わない、ナギサの綺麗なウタは似合わない、と思った。

ポケットの中には普段使っているものよりも質のいいメタリックで創った、ハナの髪飾りが入っていた。

リクオはそれを壊さないようにそっと握りしめて、はっきりしない視界のまま黒い雲に覆われる空と、荒れる海を睥んだ。そして明日には絶対雨が止んで、空は青く、海は穏やかで、雲がゆったりと流れるいつもの場所に戻っている事を祈った。二回目のアラームが鳴るまで、ずっと祈り続けていた。

その夜、ハコを取りに来たセンセイにナギサが来なかった事を話してみた。するとセンセイは笑顔で、「この雨じゃ、普通は出歩かないよ。だから大丈夫」と答えた。リクオはとても安心した。そして、夜の間ずっと雨が過ぎ去ることを祈った。

明け方になると雨の音は少しずつ治まり、陽が昇る頃雨はすっかり止んでいた。

リクオは踊るような気持ちで仕事をした。早めに仕事を済ませて、チョウのブローチも創った。ハナもチョウも見ただことはなかったけれど、ナギサの話で何回も聴いていたので自信があった。

昼休みになると彼は、出せる限りの速度で灯台までの道のりを走った。

裏を覗いた。ナギサはいなかった。

リクオはわけがわからなかった。灯台と島の舳先の間を何往復も、何往復もしながらナギサがいない理由を考えてみた。

昨日のように納得のいく理由は得られなかった。二回目のアラームが鳴ってリクオは仕事場に戻った。

次の日、リクオは更にヤマのペンダントを創って灯台へと向かった。

ペンダントを創るのは初めてだったから、早くナギサに見てもらいたかった。

裏を覗いた。ナギサはいなかった。

次の日は、灯台の髪飾りを作ってみた。贈り物が四つも溜まるのは初めてのことだった。

ギシギシと震える足を、引きずるように走って灯台に向かった。

裏を覗いた。ナギサはいなかった。

次の日は、羽のペンダントを作った。しかしナギサは来ない。

次の日は、雲の髪飾りを作った。しかし、ナギサは来ない。

なんで来ないのか。考えても考えても、リクオにはわからなかった。

次の日も、次の日もナギサは灯台の裏に現れなかった。

リクオはどうしようもない心地で一週間を過ごし、ハコを取りにきたセンセイに何処に行けばナギサに会えるかを聴いた。しかし、センセイは悲しそうな表情を浮かべるだけで、何も答えてくれなかった。ただ一言、「来ないのならば、諦めなさい」と呟いた。

リクオは生れて初めて、自分が創ったハコを壊した。

何故壊したのはわからなかったけれど、何かを壊さずにはいられなかった。

それから、ナギサに渡すことの出来なかった贈り物も全て溶かして、一つの塊にしてしまった。

ただの歪な金属の塊になったそれは、散り散りに乱れてまとまらない自分の心みたいだった。

夜が長かった。ナギサとの過去を思い出しながら、リクオは部屋の中にあるもの全てを片端から壊していった。永遠に思えた夜が明けるとき、部屋の中にはもう形をなくした残骸しか残っていなかった。

その朝、初めてリクオは仕事をしなかった。何もせずに作業場の机に座り、昨日自分が壊したハコと、贈物だったはずの歪な塊を見下ろしながら昼休みまでの時間を潰した。

昼になり、彼はギシギシと軋む足を引きずり、視線を地面に落として灯台へと向かった。もう、贈り物はなかった。ポケットには握りつぶしたハナの髪留めの破片が入っているだけだった。

灯台の前に付き、リクオはゆっくりと顔を上げた。そっと薄茶色に汚れた白いアスファルトの表面に触れる。そしてゆっくりと島の先端に向かって歩き出した。

半分まで来たところで、リクオは灯台の裏に僅かに揺れる影を見た。

その瞬間、彼は地面を蹴るようにして走り出した。

頭の中は真っ白だった。ナギサが来てくれたと言う喜びに包まれて、ただそれだけになった。

――しかしそこにいたのは黒く、丈の長い服を着たナギサとは似ても似つかない男の人だった。

「あなたがリクオ、君ですか？」

リクオは愕然とした心地で、小さくその問いに対して頷いた。

黒い服の男の人はふうと小さく息をついて、言葉を続けた。

「私は孤児院のものです。ナギサから伝言を頼まれてきました」

「伝言……？ どうして、ナギサは来ないんですか？ どうして、会いに来てくれないんですか？」

「あの子は……今、とても危険な状態なんです。昨日までずっと目を覚ましませんでした。今朝やっと目を覚まして、それで、私が伝言を頼まれてきたんですよ」

危険な状態？リクオにはよく意味がわからなかった。

ただ、ナギサがずっと眠っていて、それで自分に会えなかったということは理解できた。

「ナギサは、どうして眠っているんですか？」

「あの子は元々体が弱かったので、いつかこうなることはわかっていたんです」

「ナギサは……どこか具合が悪いんですか？」

黒い服の男の人はリクオの事を見下ろして、小さく咳払いをした。

そして視線を空と、海と、薄く広がる灰色の雲に移していった。

「リクオ、ごめんなさい。会いに行くことができなくなってしまいました。約束を守れなくてごめんなさい。リクオ、本当にごめんなさい。……ナギサは苦しみながら、そうあなたに伝えてほしいと言っていました」

「ナギサは……苦しんでいるんですか？ クスリは、飲んでいないんですか？」

「クスリが利く状態じゃあ、もうないんです。後はもう、神に祈ることくらいしか……」

「神様に？ じゃあ、ウタをウタえば————」

リクオがそう言おうとすると、黒い服の男の人は小さくチツと舌を鳴らした。

そして、もう話す事は何もないと言うように彼に背を向けた。

リクオは焦ってその背中に声を浴びせた。

「ナギサに会いに行かせてください。お願いします、合わせてください」

男の人は振り向かなかつた。リクオは諦めなかつた。

「ナギサに会いたいんです。ずっとそばにいるって、約束したんです。お願いしま——」

「孤児院は、機械の侵入が許可されていませんから、諦めてください。伝言を頼まれたことでさえ、こちらとしては最大限に譲歩したんです。ナギサがここに来ることはもう二度とないでしょう。では」

男の人は顔をリクオに向けることすらせず、そう言って灯台から離れていく。

リクオは昨日の夜に彼を襲った衝動にとらわれた。黒い背中を壊してしまおうと思った。

しかしそう思った瞬間、体中の力が全て抜けて、彼はへたっと地面に崩れ落ちた。

そして黒い背中が見えなくなるまで全く動くことが出来なかつた。

灯台の裏側と島の舳先の間には、またリクオ一人だけになった。

彼はゆっくり立ち上がった。

そして、物言わず立ち続ける薄茶色に汚れた灯台を思い切り殴りつけた。手の表面が削れた。また殴った。殴った。殴った。

リクオは、痛かった。

体中がバラバラになってしまうのではないかと思えるくらいに、痛かった。

訳がわからなくなって、何かを喚いて、ひたすらに灯台の薄茶色の壁を殴った。

何度もアラームが鳴ったけれど、リクオは仕事場へは戻らなかつた。

ただ茫然と、灯台にもたれかかって、ナギサの名前を叫び続けた。

センセイがその事に気付いて連れて帰るまで、彼はずっとそうしていた。

Part.4(最終回)

「リクオ、しょうがないんだよ」

センセイはリクオの頭を撫でながら抑揚のない声でそう言った。

しかし、その言葉は彼の胸には届かなかった。

リクオはただ震えていた。胸の痛みにもがきながら、ギンギンと体中を軋ませていた。

「孤児院にお前たちは入れてもらえないんだよ。だから、諦めなさい」

「……ナギサと、ずっとそばにいるって約束したんです」

「でも、その子は病気なんだろう？　じゃあ、どうしようもないんだよ」

リクオは昨日壊した残骸に混じって、床に転がっていた。ベッドは壊してしまっただけからもうなかった。彼が力を込めて床を殴りつけると、散らばった木屑がパラパラと舞った。

センセイは長く溜息をついた。

「リクオがこのままじゃ、困る人がいるんだよ。リクオの仕事は人を幸せの国に送りどける重要な仕事なんだから」

「……ナギサ」

「ん？」

リクオは呻くように、ナギサの名前を呟いた。そしてセンセイに尋ねた。

「幸せの国に行けば、ナギサを苦しめるような病気や痛みはなくなるのでしょうか？」

「えっ？」

「幸せの国に行けば、ナギサを苦しめるもの全部が消えてなくなるのでしょうか？」

「リクオ……」

リクオは木屑の散らばる床に這いつくばったまま、強く自分の掌を握った。

手の甲の塗装はもう完全にはがれていた。

脈絡もなくナギサの頬の柔らかさを思い出して、また強く床を殴った。

「孤児院の人は、その子のことをなんて言っていたんだい？」

「……今朝までずっと眠っていて、クスリを飲んでも利かなくて……神様に祈るしかないって、言っていました」

「そうか……」

センセイは顎に手を置いて、目を閉じて何かを考えていた。

リクオは祈る様にセンセイの言葉を待った。

もし、センセイが肯定してくれたら自分がナギサを幸せの国へ連れて行こう。

そして、今度こそずっとナギサのそばに居続けよう。そんな事を考えながら。

センセイはゆっくりと細い目を開いた。そして塗装の剥がれきったリクオの手を両手でそっと包みこんで、言った。

「……そうだな。幸せの国には病気も、痛みも、人間を苦しめるようなものは何もないよ」

「本当ですか？」

「ああ、本当さ。幸せの国にはテンシもいる。この世の綺麗なもの全部がそこにあるんだ」

リクオは想像した。美しく輝く幸せの国で、ナギサと自分がニコニコと笑っている未来を。「センセイ。ボクのハコは本当に、人間を幸せの国に連れて行ってあげることができるんですか？」

「……ああそうだよ、リクオ。お前は今まで沢山の人間を幸せの国に送ってきたんだ。だから、その子のことも送ってあげられるよ」

「本当ですか？」

「……ああ。本当さ——」

センセイは皺を深くして微笑み、そう言った。

リクオはそれまで転がっていた床に手をついて勢いよく立ちあがった。そして深く、深く、センセイに頭を下げて、言った。

「センセイ、お願いします。ナギサのハコを創らせてください。ナギサを幸せの国へ連れて行きたいんです。きちんと、仕事もします。仕事もして、そしてナギサのハコも作りたいんです。お願いします、ナギサのためにハコを創らせてください」

リクオは何度も何度も頭を下げた。頭の中で、テンシと戯れるナギサの笑顔を思い浮かべながら何度も、何度も。「リクオ、もういいから」と制止されても、彼は頭を下げるのをやめなかった。センセイに肩を掴まれてようやく、リクオの体は静止した。

「リクオ、もういいんだ。明日から材料を余分にやろう。だから創ってあげなさい、最高のハコを」

「いいんですか？」

「ああ。お前には結局……それしかできないんだ。だからその子に、リクオのできることをしてあげなさい」

リクオはセンセイの胸に顔をうずめて、何回も何回もありがとうございますと言った。大きな胸はナギサと同じ生身の人間であるのに、随分固いように思えた。またナギサの事を思い出した。最高のハコを創って、そして一緒に幸せの国へ行こう。彼は強く決意して、ナギサの笑顔を頭の中一杯に広げた。

早く、ナギサのそばに戻ろう。そして、今度こそ「ずっと」そばにしよう。

...

日が明けてすぐに、リクオは仕事を始めた。いつもよりも丁寧に作業を進めながら、頭の中ではナギサの為のハコをどんなものにするかを考えていた。

普段彼はセンセイの持ってきた資料を読んで、そこに記された数値通りに金属を溶接して、デザイン通りに金属を掘るだけだった。

しかし、今回は数値もデザインも何も無かった。あるのはリクオの中にあるナギサとの記憶だけだった。

昼休み、彼はもう灯台へ行かなかった。その代わりに机に向い、真っ白な画布にハコの設計図を記していった。

何本も何本も、線を引いては消して。リクオは二人で幸せの国へ行くために、完璧なハコを作りたいかった。

だから彼は線を引いて、消してを繰り返し、ハコの幅を決めるだけの作業に一時間もかけた。

昼休みが終わるとまた仕事に戻り、丁寧にかつ、いつもの二倍の速さで仕事を片付けた。

終わるとすぐにまた画布に向かい、ナギサのハコの設計図を描いた。

ハコの大きさや形が決まると、次に彼はデザインを描き始めた。

トリや、キや、カワや、ネコや……ナギサから聞いた彼女の故郷にあるもの、リクオに取っては見たこともないものを想像して必死に描き連ねた。

設計図作りは朝まで続いた。

センセイが材料を届けてくれる頃、ようやくナギサのハコの設計図が完成した。センセイはそれを見て、「すごい」と口で言うのと同時に、とても悲しそうな顔をした。リクオにはその理由がわからなかった。

それから毎日リクオは仕事をして、終わったらナギサのハコを創ってを繰り返した。

普段は一週間で一つのハコを創るのに対して、ナギサのハコにはそれ以上の時間をかけた。

早く会いたかったけれど、そのせいで中途半端なハコを創って幸せの国に行けなくなっては困ると彼は考えたからだ。

二週間をかけて創ったハコは、リクオが今まで創った中でも文句なしに最高の出来栄えだった。彼は最後に、ハコの隅に小さく二人の名前を記した。それで完成だった。これなら絶対に幸せの国に辿りつける、とリクオは満足気に微笑んだ。

ハコの表面にはキが生えていて、トリがとんでいて、カワが流れていて、ネコが遊んでいて、灯台があつて、空があつて、海があつて、雲があつて、テンシがいて……リクオの想像するナギサのいた故郷が刻みこまれていた。

．．．

センセイは完成したそのハコを見て、何も言わないままリクオに一枚の紙を差し出した。そして小さな抑揚のない声で「孤児院への地図だよ。中に入つてはいけないけれど、敷地の外で声を上げるくらいなら許されるはずだから……行ってみなさい」と言った。

リクオは深く頭を下げて、その地図を片手に部屋を飛び出した。扉が閉まる瞬間に、センセイが悲しい顔をしてナギサのハコを撫でているのが見えたけれど、リクオにはその理由がわからなかった。

夜の道は静かで暗くて、リクオの地面を蹴る音だけが辺りに響いていた。もう少しでナギサに会える。その気持ちを抱きしめて、リクオは暗い道を、ナギサのへの道を、足を震わせながら走った。

孤児院は島の丁度中心にあった。黒い宵闇の中にひっそりと浮かぶ細長い建物の天辺には、ナギサの服のように白いクロスが掲げられていた。

リクオは敷地を覆うコンクリートの塀に手をついた。そして、目を瞑った。

頭の中にはナギサとの日々が浮かんだ。空と、海と、様々な雲を背景にして彼女は幸せそうに笑っていた。楽しそうにウタをウタっていた。青い瞳の中にはリクオの姿がある。

目を開いた。

リクオは強く息を吸い込む。そして、抑揚のない声で思い切り叫んだ。

「ナギサー！ ナギサのためにハコを創ったんだ！ 幸せの国へ行くためにハコを創ったんだ！」

同じ台詞をリクオは何回か、叫んだ。そのうち、幾つかの部屋で電気が付きだした。リクオは少し焦った。しかし、ギシギシと震える体に力を込めて更に叫んだ。

「ボクは、待ってる！ あの灯台の裏で待ってるから！ 二人で幸せの国へ行こう！そして、今度こそずっとそばにしよう！」

ギィと音を立てて孤児院の扉が開き、中からあの日灯台の裏に来た人と同じ服を着た男の人たちが数人、ぞろぞろと出てきた。そしてリクオの事を羽交い締めにして、孤児院から離れたところまで運び、思い切り放り投げた。

リクオはまた孤児院まで戻って、ナギサの為にハコを創ったこと、灯台の裏で待っていることを叫んだ。今度は羽交い締めにされたうえで、縄で縛られて孤児院から少し離れた所に放り投げられ、置き去りにされた。

しばらくその状態のままで同じフレーズを狂ったように叫び続けていると、センセイがやってきてロープをほどいてくれた。そして「もう、十分に伝わったよ。だから戻ろう」と言って、リクオの体を抱き起こしてくれた。リクオは不安だったけれど、その言葉に頷いて先を歩くセンセイの背中をぼんやりと見つめながら帰路についた。

・・・

部屋に戻ってから夜が明けるまで、リクオはハコの中でうずくまり、ひたすらにナギサの事を考えていた。

・・・

日が明けると同時に、リクオは灯台の裏側へと向かった。背中にナギサのハコを背負って。空には雲がなく、太陽に照らされた灯台の影がリクオを導くように真っ直ぐ彼の歩く道へと延

びていた。

灯台の裏側に辿り着くと、そこにはまだ誰もいなかった。

リクオは島の舳先にナギサのハコを置き、そしていつも二人で腰掛けた灯台の裏側のくぼみに腰かけた。

空と海の間で自分の創ったハコがキラキラと輝いている。太陽の光を反射している。

ナギサの故郷はきっとこれくらい輝いているんだろう。そして、きっと幸せの国もこれくらい輝いているに違いない。

そう思った瞬間、何故かリクオの胸がギシギシと痛んだ。

理由はわからないけれど、身を悶えさせる鋭い痛みが彼の心を襲った。

幸せの国へ、本当に行けるのだろうか。

本当に、あの日々以上の幸せがこの世界に存在するのだろうか。

リクオは、ナギサとこの場所で、二人でいられるだけで、本当に、心の底から幸せだったことを思い出していた。

雲のない空を見るのは初めてだった。島にはトリもテンシもいないので、飛んでいるものは何もなかった。

リクオは寂しい空を見上げながら、痛みに悶えながら、ナギサの事を待った。

————太陽が真上に上った頃、リクオは微かな物音を感じた。

反射的に立ち上がって、耳をすませる。微かに聞こえる音は何かを引きずるような音だった。

灯台の裏側の裏側に回り、ついさっき自分が登って来た道を見下ろす。

リクオは見た。

その瞬間、走りだした。

転がるように坂道を下って、目的の場所へはすぐに付いた。

そこはナギサの隣だった。

彼女は足を引き摺りながら、坂道を登っていたのだ。

「ナギサ、会いたかった、ナギサ」

「……ごめんね、リクオ……。私、本当に……」

ナギサはゲホゲホと苦しそうに咳をした。リクオは彼女が苦しそうなのがとても悲しくて、なだらかにしな垂れた細い背中を柔らかくさすった。

「大、丈夫だよ、リクオ……。本当に、大丈夫……」

「ナギサ……」

ゲホッゲホッと咳は続いた。それでもナギサは微笑んでいた。苦しそうに微笑んでいた。

リクオは「あと、少しだよ」と彼女の耳元で囁いて、背中をさすり続けた。

本当は彼女を負ぶってあげたかった。抱き抱えて、灯台の裏まで連れて行ってあげたかった。しかし、非力なリクオにはそれさえもできなかった。

彼はただハコを創る為だけに創られた、人間ではない、機械だった。

少しずつ、少しずつナギサとリクオは灯台へと近づいた。ナギサの咳は収まらなかった。ゲホッゲホッと苦しそうに噎せるその声に、笑顔で話をして笑顔でウタをウタっていた時の名残を感じて、リクオの心は引きちぎれそうになった。あと少しだ。あと、少しだ。彼は祈る様にそう呟

いて、ナギサの背中をさすった。

太陽が真上から少しだけ移動してきた頃、やっとナギサの手が灯台に届いた。

リクオの「もう少しだよ」とナギサの「大丈夫だよ」が綺麗に重なった。

本当に、もう少しだった。大丈夫だよ、は嘘だった。

灯台に手が触れた瞬間、ナギサの体の力がガクツと抜けた。リクオは慌てて彼女の体を支えた。もう、彼女は咳すらもしていなかった。ただヒューヒューと、か細い音で息をしているだけだった。

「ナギサ、あと少しなんだ。あと少しで、ナギサのハコまで辿りつけるんだ。幸せの国へ、行けるんだ」

「ハコ……？ 私の……？」

本当に小さな声でナギサが尋ねた。リクオはその体を支えて、少しずつ足を踏み出しながら答える。

「うん、そうだよ。ナギサのハコだよ。ボクが、創ったんだ。ナギサのそばにいたくて。ナギサと、幸せの国に行きたくて。最高の出来なんだ。あれなら絶対に幸せの国へ行ける。あと、ちょっとなんだ。あと少しで、ボク達は幸せの国へ行けるんだ」

リクオは抑揚のない声は、リズムをなくして揺れていた。島の先端が見えてきた。二人の目前に雲一つない空と、波一つ立たない海が広がり始めた。

「……幸せの国？」

「そうだよ。ボクのハコは、人を幸せの国へ連れていくことが出来るんだ。だから、もうナギサは苦しまなくていいんだよ。その国には病気も、痛みも、人間を苦しませるようなものは、何も、ないんだ」

ナギサはヒューヒューと息をしながら、力なく「素敵だね……」と呟いた。彼女の足はもう地面を蹴ることができなかった。リクオは彼に与えられた最大限の力を出して、その細い体を支えた。

島の舳先に置いてあるナギサのハコが、もうすでに視界の端に姿を現し始めていた。

「幸せの国にはテンシもいて、トリもいて、キがあつて、カワがあつて、ネコがいて、ハナが咲いていて……この世の綺麗なものの全部があるんだ」

「……素敵、だね。私が、好きなもの、ばっかり……」

ゲホッ。ナギサは一つ、大きな咳をした。その瞬間、大量の赤いものがナギサの口から吐き出されて、彼女の肩がずるりとリクオの肩から落ちた。

うつぶせに倒れたナギサを、リクオは何とか起こそうとする。しかし、非力な彼は彼女を起こし上げることが出来なかった。彼は焦った。もう少しなのに、と焦った。そんなリクオを見て、ナギサが小さく「リクオ、私を、仰向けに、させて」と呟いた。息も切れ切れに。口元から赤い液体を零して。

リクオは言われたとおりに彼女を仰向けにさせた。もう、灯台の裏側だった。ナギサは首を傾けて、島の舳先に置いてある彼女のハコに目をやった。

「リクオ……」

「ナギサ……あと、少しだよ」

「うん……。ねえ、あのハコ……。トリが、描いて、あるよ」

「うん、トリもいるし、テンシも、いるよ」

「キが生えてて、カワが流れてて……」

「うん、ネコもいて、ハナも、咲いているよ」

「……素敵。ホントに、素敵……。懐か、しい……」

ゲホッ、ゲホッ。ナギサはまた咳をして、赤い液体を吐き出し、ヒューヒューと喘いだ。リクオは心の中をぐしゃぐしゃにしながらナギサの口元を拭い、そして彼女の柔らかい唇に自分の固い唇を触れさせた。唇を離すとナギサはにっこりと優しく微笑んだ。そして「初めて、リクオから、してくれた」と呟いた。

「リクオ……」

「ナギサ、もう少し待っていて。センセイを連れてくるから。そうしたら、ハコに——」

「ううん、リクオ。……ここに、いて」

「でも、ナギサ……」

「ねえ、リクオ。……ありがとう」

ナギサはリクオの頬に手を当てて、そう言った。いつもの柔らかい手は、いつもより細くて、力がなくて、白くて————。

「私、幸せだったよ。ありがとう……」

「ボクも幸せだよ。これからも、ずっとそばにいるよ」

「うん、うん……。リクオ、ありがとう……。ごめん、なご……」

ナギサの目からまた、あの透明な液体がこぼれ始めた。

リクオはその液体もごしごしと優しく拭った。

しかし、それは何度拭っても止まらなかった。

ヒューヒューというナギサの息が少しずつ浅くなる。

彼女はか細い声で「キス、して」と言った。リクオはそっとキスをした。透明な液体は、止まらなかった。

しばらくその唇は離さなかった。

スッと一陣の風が通り抜け、リクオはやっと長いキスを終えた。いつの間にか、ナギサの頬を流れる液体が止まっていた。

彼女は瞼を閉じていた。

ヒューヒューと言う苦しそうな息も、苦しそうな咳も、止まっていた。

彼女は瞼を閉じていた。

「ナギサ、センセイを連れてくるよ」

リクオは瞼を閉じているナギサにそう語りかけた。

彼女は何も答えなかった。

また風が吹いた。横たわるナギサの黒い、普段よりもごわごわした髪が褐色の土の上でサワサワと揺れている。

「ナギサ、センセイを連れてくるよ」

リクオはもう一度語りかける。しかし、ナギサはもう口を開かなかった。

リクオは少し不安になった。でも、彼女がとても幸せそうな笑顔を浮かべていて、咳も、苦しそうな息もしていなかったのでもちよっとだけ安心した。

「じゃあ、行ってくるね」

安らかなその表情にそう言い残して、リクオは島の舳先から離れる。二人で登って来たばかりの坂を駆け降りて、センセイのいる仕事場まで急いだ。

．．．

灯台の裏側に来たセンセイは、安らかな表情で横たわっているナギサに深く頭を下げた。

そして一言「……頑張ったね」と呟き、胸の前で小さく十字を切った。

「センセイ。ナギサをハコの中に連れていくの、手伝ってください。ナギサはもうあそこまで歩けないんです」

「……ああ、そうだね」

センセイはそう言って、リクオのことを強く抱きしめた。それから彼女の体をそっと持ち上げる。手足や首がブランとしたナギサはまるで作り物のようだった。ナギサから聴いたニンギョウの話の思い出す。人間や動物の形をした作り物でとても可愛いんだと、ナギサはリクオに教えてくれた。

「リクオ、蓋を」

ナギサをハコの中へと運び終わったセンセイは、目を伏せて、悲しそうな顔をして、そう呟いた。リクオはセンセイのその言葉と、その表情が不思議だった。

「え、なんでですか？」

「蓋を閉めないと、ヒツギが海に沈んでしまうだろう」

リクオはヒツギという言葉に少しだけ首をかしげて、そして思い出した。そうだ、ヒツギと言うのは確かこのハコの名前だ。

「はい、それは知っています」

「じゃあ、早く蓋を……」

「でも、まだです」

リクオの言葉に、今度はセンセイが不思議そうな顔をした。

「何が、まだなんだい？」

「ボクが、まだ入っていません」

「なっ」

リクオが当然のようにそう言うと、センセイは凄く驚いて、その後で物凄く悲しそうな表情を浮かべた。そして、ヒツギに手をかけようとするリクオの肩を掴んで、彼がそこに入ろうとするのを止めた。

「駄目だよ、リクオ。お前は入っちゃ」

「え、なんでですか？」

「これは、彼女を幸せの国へ送るためのものなんだから」

「でも、ボクはナギサとずっとそばにいると約束しました。だから、このハコに乗ってナギサと一緒に」

「……もう、いいんだよ、リクオ。その約束は、もういいんだ。リクオは最後に彼女のそばにいてあげたじゃないか。だから、約束は果たせたんだよ」

最後？リクオはセンセイの言っている事の意味がわからなかった。彼は掴まれた腕を振り払い、その勢いでハコの中に転がり込んだ。落ちた拍子にナギサの腕を思い切り踏んでしまった。リクオの体は固い。彼は、ナギサがとても痛かったはずだと思った。

「ごめんね、ナギサ」

言葉は返ってこなかった。相変わらずナギサは安らかな表情で目を閉じていた。

眠っているんだとリクオは思った。だから「おやすみ」と優しく耳元で囁いた。

「だから、大きかったんだな……」

「えっ」

ハコの外で、センセイの微かな声が聴こえた。

リクオがハコから顔を出すと、センセイは「いいや、なんでもない」と呟いた。

センセイの目からもナギサと同じ透明の液体がポロポロと零れ、煤けた白い白衣に点々を作っている。生身の人間はみんなそれを流すのかな、とリクオは心の中で考えた。どんな時に流すものは、やはりわからないままだった。

「……リクオ」

「はい」

「リクオは、その子のことが、好きだったのかい？」

「ボクは、ナギサにコイをしています。ずっとそばにいると約束しました」

「……その子は、仕事よりも、私よりも、他のどんなものよりも大切なのかい？」

「はい。ボクはナギサの為に生きています。ナギサのそばにすることがボクの意味です」

「そうか……」

センセイの目から溢れる液体は止まらなかった。ちらりとナギサの方を見る。彼女の目からはやはりもう、なにも流れていなかった。

そう言えばさっきからずっと、咳もしていない。苦しそうな息もしていない。もしかしたら自分の創ったハコのおかげなのだろうか、と少しおこがましいことを考えていた。

「センセイ。幸せの国には、どれくらいで着くんですか？」

リクオの質問にセンセイは答えなかった。ただ、黙ってハコに近づいてナギサの隣に座る彼の首元に手を伸ばした。ドライバーを使ってその蓋を開けた。そしてリクオの何かをそのドライバーの背で叩き壊した。

彼は何を壊されたのか、わからなかった。ただ何かを壊しているセンセイの表情がとても優しく笑っていたので、安心して自分の体を預けていた。

「……これでいい」

そう言うとセンセイは首筋の蓋を蝶番ごと彼の首からはずして、白衣のポケットの中にした。

「……これは、記念にね」

「なんのですか？」

センセイはまた、答えなかった。

「……リクオ」

「はい」

「たぶん、その子は幸せの国に着くまで目を覚まさないと思うんだ」

「えっ、そうなんですか？」

「ああ、そうだよ。だって、気持ちよさそうに眠っているだろう？」

センセイに言われてナギサの顔を確認する。本当に、その通りだった。

ナギサは幸せそうに、気持ちよさそうに、太陽の光を浴びながら眠っている。

「はい、とっても幸せそうです」

「そうだろう？ ……だからね、リクオ。お前も、眠るんだ」

「えっ？」

「幸せの国に着くまでね。お前も、目を閉じて一緒に眠るんだ」

センセイはリクオの頭を撫でながら優しくそう言った。その温かい感触を感じながら、もう一度ナギサの顔を見る。

幸せそうな表情。堰を切ったように沢山の声が蘇ってくる。胸が痛くて、痛くて、たまらなくなかった。早くナギサの声が聞きたかった。

「でも、二人とも眠っていたら幸せの国についても気付かないかもしれない」

「大丈夫だよ、リクオ。幸せの国には、テンシがいるって言ったろう？ ちゃんと、起こしてくれる。だから、安心して眠りなさい」

大丈夫だから。センセイは笑顔でそう言った。リクオは大丈夫なんだと思い、安心した。

「わかりました、センセイ。ありがとうございます」

「……いいんだよ、リクオ。お前の創ったヒツギは、最高だから。きっと、素敵な幸せの国へ、行くことができるよ」

センセイはそう言って、ごしごしと汚れた白衣の袖で自分の目元を拭いた。そして二人の入っているハコに立てかけられていた蓋を、ゆっくりと持ちあげた。

「……リクオ」

「はい、センセイ」

「さようなら。……おやすみ」

ハコの蓋が閉じられる。さっきまで見えていた空がもう見えなくなって、視界にはただただ黒が広がっていた。

「センセイ、さようなら。おやすみなさい」

リクオの声はハコの中にくぐもった。外の音はもう、何も聞こえない。彼の創ったハコは完璧だった。もう、ハコの中はそこだけでただ一つの世界だった。

リクオはナギサの方を向く。世界は暗闇で、視界にはなにも映らない。

でも、リクオにはナギサの顔がしっかりと見えていた。

そっと、手を伸ばす。あると思った場所に彼女の手はあった。柔らかい手を握った。

そっと、首を伸ばす。あると思った場所に彼女の顔はあった。短いキスをした。

「ナギサ。もう、離れなくていいんだよ」

リクオの声が世界に響いた。彼はもう一度キスをした。柔らかい唇に固い唇を押しつけた。

暗闇の中で、彼は目を閉じる。開いていたときそこにあるのは闇だったのに、閉じてみると彼の視界には、たくさんの光景が広がっていた。

空がある。海がある。小さく細切れて散らばった雲がある。自分は灯台に腰をかけている。島の舳先には———ナギサだ。彼女が、微笑んでいる。

白い服と黒い髪が温かいそよ風に吹かれて、空と海の狭間でヒラヒラとたなびいている。

耳を澄ますと、ウタが聴こえてきた。綺麗な音。ナギサの音。

「ずっと、そばに居てね？」

その時、はっきりと、ナギサの声が聴こえた。

寝言なのだろうか。そう思ってリクオは横に首を傾けようとした。しかし、体が動かなかった。

。

なんでだろう、と考えて彼は単純な事を理解した。

ああ、そうか。自分は眠ろうとしているんだ、と。

一度目を開こうとしたけれど、もうそれも出来なかった。

よく考えたら、今はもう開く必要がなかった。

気が付くと、あの日のナギサが自分に向かってなにかを笑顔で語りかけている。

口元を見ていると何と言っているのか、わかった。

リクオ、大好きだよ。

ナギサは笑ってる。

テンシみたいに、笑ってる。

だから、リクオも彼女に向かって笑いかけた。

これで、目を覚ましたら幸せの国だね。

ボクはハコを創れて本当に、良かった。

起きたらまず、ウタを聞かせてほしいな。

おやすみ、ナギサ。

ずっとそばにいるよ、ナギサ。

大好きだよ、ナギサ。

リクオの意識が消えていく。

彼は、ナギサに出会ってから初めての眠りについた。

あとがき

最後までお読みいただきありがとうございました。

本書籍は5年ほど前、『オズの魔法使い』にインスパイアを受けて書いた短編です（え、どこが？と言われそうですが……）。

まだOSがXPだった頃のWindowsのPCの中に眠っていたのですが、ただ眠らせておくのはもったいないと思い、今回ほとんど手を加えない状態で電子書籍としてあなたにお届けしています。

もし、文字数30000字にも満たないこのつたない文章から、あなたがなにか感じるものがあつたとしたら、これほど嬉しいことはありません。

最後になりますが、なにか感想等ございましたら下記メールアドレスまでご連絡ください。
。labo8823@gmail.com

本作は「世界の終わりと君の空」というシリーズの一片なので、今後もしかしたら、同シリーズで後5本くらいお送りしていくかもしれません。そのときはぜひぜひ、時間もお目通しいただけると幸いです。

それでは、本書籍をご購読いただき、誠にありがとうございました。